

山風颯とひぐらしの聲合はす

別れ言葉絹色の尾花目さきに

雨夜の芒うすうす徑の見えるをり

たまゆらの虫の音捲いてきし夜霧

草色やまこと秋日のここに澄む

あの燈この燈さやか秋蠶も二眠時

竹原時雨いくたび闇の崩えにけむ

柿落葉吹き廻はされて暮れにけり

炭焼く烟りゆらゆら空は青ばかり

炭乏し夜の薔薇のあえかにくづれ

千大根獨樂打ちこんで叱られし

霜の畑いしくも大根ぬけ出でし

笠置山三句

炎上の夢ありありと深夜はも

落葉日和杉穂のゆれを見下しつ

枯葉ちらちら山の子の唄聞き下る

寒の日暮れぬ九官鳥横向きしまま

日がな鳴く冬木林の鳥見たく

天門冬寒をはかなの青みかな

昭和三年

寒木瓜や熱去る汗のむづがゆく
幻燈戻り闇の吹雲に埋れしが

うなる風迎への母の見てをりし

七草やおはぐろつけし母憶ふ

むさみ屋が梅を見上げて肩かへし

芽ぐむ樽山朝月の迅きうすれ

工場風枯れきりしよな木の芽ぐみ

木の芽雨光りくづれし籠の雑魚

あぢきなや子は紙雛を折つてゐる

笛のなき雛の手のさまさびしかり

風光る連翹の夜明けとなりぬ

藪山吹竹代りの子が顔出しし

幌のなき車がつづく夜の櫻

月朧犬が貯へほつてゐし

宵朧手作りの茶のにかかりき

降り移る野の雨白き松の花

草旋風青い蛙がけろとして

冷たきは杉のもれ日の山蛙

轍白し月が折ふし雨降らす

家近し桑の實たべし口拭いて

母の死三句

西へ西へゆく梅雨雲を見つめては

峯雲見つめつ登りゆく心ひとすぢに

うちのダリヤうちのメロン靈やすかれな

傘直し梧桐の雫見上げては

冷えてきし白夜の卯木花よせて

月の竹ででむしがのぼりゐるなり

柿若葉見上げて旅の靴をぬぐ

濱砂のうす濕りふむ朝の虹

虹の空風は山越す雲追つて

夏嵐蛇に馬の尾とどかすて

母に見する兒の手の電はとけてるし

夕蜻蛉もち竿に道ふさがるる

草の花虫に喰はるる虫ありて

稻の花雲ひやびやとさめはてし

稻妻や徑のどれも水ありて

秋霖や素足に氣づく夜の廊下

虫探りが虫きく縁の先きすぎし

むつちりと砂丘の淋し濱銀河

夕紅葉木澗坂の間の空の雲早く

柿落葉日向の風が足毛吹く

抜毛多き朝なり鏡冷やかに

幹づたひ木の葉落ちくる鳥日和

山の中葉音のからび聞きすめる

藁灰の嵩のへりやう朝寒き

ひしひしと草葉がしまる宵の霜

霜の聲木木の木精のかげやある

犬が犬の鼻なめまはす軒日向

冬日向研屋が双物かざし見し

土間の冷え冬の百足は打たざりき

枯野原入日追ふ雲つづきけり

踏み切りの燈し粉雪の舞ふばかり

雪の大木寄生木の葉の巻き枯れて

軒行燈のゆれてゐたりし旅吹雪

昭和貳年

電燈工夫底の雪をかぢりるし

よなべ仕舞ひ膝の兒の枕移しつ

山茶花や月のかけらの消えもせで

嗽
ぎ
を
れ
ば
葉
柳
ゆ
れ
か
か
る

藤
盛
り
獅
子
の
太
鼓
の
門
邊
す
ぐ

顔
剃
り
や
現
つ
に
細
る
麥
の
笛

若葉かげ小鳥の聲のちらついで

汽車の蜜柑どれも水気なき薄暑かな

燈籠の影の長きを子はふみつ

夕涼の廊下の風に坐りけり

初吊りの蚊帳太い腕なせてゐる

蟻の喰ひ入る裸虫ころころ暑し

土暑し 蜥蜴出てきて尻尾なき

夏 梟 雨 戸 一 本 明 け て を り

長 良

目薬さして夕立つ葉音聞きゐたり

草刈りが清水に花をつけ置きし

草の戸に手紙投げある夕蜻蛉

かなかなや茄子の朝露色はしる

鳴く地虫糸瓜の水のやうたまる

朝鴉や坐る蒲團の人温くき

草雲雀茶器の焼き疵惜まれて

月の虫節ととのはぬいとしかり

堅き枕氣になる旅寝虫鳴いて

前歯もて食む味なさよ秋の風

火焚かんか鴟の夕日の森がすれ

稻刈りのうしろ山霧まさかか

畔草の枯れしに落穂かか

水かれし堰の落穂の暮れかかる

朝寒やどの齒も水のしみてきし

氷雨暗き旅寝や妻に便り書く

昭和十四年六月二十日印刷
昭和十四年六月二十五日發行

烏凡句抄
非賣品

橫濱市神奈川區旭ヶ丘四五

著者 石川等

東京市京橋區銀座三ノ四

發行者 佐藤保太郎

東京市京橋區銀座三ノ四

印刷並發行所 株式會社 文祥堂

390
146

終

